

Bibliophiles

ビブリアファイルズ No.12(2018年度)

新着図書案内・お知らせ 西宮東高校図書館

(ここで紹介するのは新しい本の一部です。)



『魅了する科学実験』

早稲田大学本庄高等学院実験開発班

ダイヤモンドに次ぐ硬度を持ち、高価な宝石の代表格でもある、ルビー。でも人工のルビーなら、家庭用の電子レンジで手軽に作れちゃうのをご存知? ただし「2,072℃」という超高温を作り出す必要がありますので、家で1人でやるのは厳禁ですが・・・このように、この本は独創的な実験アイデアに満ちています。上記のように危険度の高い実験も多いので、家でやりたいくなる誘惑に打ち勝って下さい。

『マツ☆キヨ: 「ヘンな人」で生きる技術』

マツコ・デラックス 池田清彦

情報トーク番組の『ホンマでっか!?TV』に出演しているおなじみの二人の対談集です。よく「ニューハーフ」に間違われるけど「女装癖のある同性愛者」のマツコは、ゲイの中でも少数派。一方、生物学者なのに「進化論」に異を唱える池田氏は、生物学の異端児。このふたりの「ヘンな人」が、日本人の変なところや、日本社会の差別、また少数派(マイノリティー)の生きる道などについて熱く語り合います。

『逆転の留学』

高野幹生

留学と言うと、「英語が出来ないから」「お金がかかるから」「海外の大学より日本の大学の方が将来有利では?」といった理由で尻込みする人が少なくないようです。でも留学すれば自然に英語は身に付きやすいですし、学費も制度をうまく活用すれば、日本の私立大学と同程度の額に抑えることが可能です。またある大学教授グループの調査によれば、海外の大学を出た人の平均年収は日本の大学よりも高い(男+70万、女+100万)そうです。この本を読んで、留学について少し考えてみませんか。

『写真でわかる世界の防犯』小宮信夫

インカ帝国(現ペルー)のマチュ・ピチュと兵庫県の竹田城の共通点とは? そう、どちらも「天空の」という形容詞が付くことですね。町や城が高い位置に作られると、「人々に見えやすいが入りにくい」ことになります。これは防犯の観点からは大変に望ましい事なのです。この本では、犯罪学研究の第一人者の作者が、豊富なカラー写真で世界92か国の遺跡や街並みの防犯を解説します。

『寝ても寝ても疲れがとれない人のための スッキリした朝に変わる睡眠の本』 梶本修身
この本の目的は、「眠れない人を眠れるようにする」のではなく、「睡眠の質を上げて、疲れをリセットする」ことにあります。例えば、朝はいつも目覚まし時計か親に起こしてもらっている諸君。信じられないかも知れませんが、「明日は〇時に起きる」と意識することで、約半数の人がその時間に起きられるのです。そしてその場合、体内のホルモン分泌の働きによって起きますので、よりスッキリと目覚められるそうです。

『ビブリア古書堂の事件手帖』

～扉子と不思議な客人たち～ 三上延

累計640万部を超えるベストセラーの「ビブリア古書堂」シリーズの最新刊です。昨年の前作「7」でシリーズは一応は完結したのですが、前作までの設定上の都合や紙数の都合で書けなかった話、また後日譚などを書いた「外伝」的な位置づけの作品となっています。ヒロインの娘・扉子は6歳になって本作で活躍しますよ。



『ざっくりわかるトポロジー』

名倉真紀、今野紀雄

もし柔らかい素材でできているなら、ドーナツの形はコーヒーカップの形に変形できます。このようにトポロジー(位相幾何学)はものの形の変形について研究し、その成果は3次元コンピュータグラフィックス(3DCG)にも応用されています。

国語科の先生方の選書で

講談社の古典シリーズ、沢山入りました!

講談社の「少年少女古典文学館」は、古典の研究者ではなく豪華な作家陣による訳で、とても読みやすいのが特長です。また随所に写真やイラストによる解説を加えることで、古典の「分かりにくさ」も軽減しています。今回は『四谷怪談』『東海道中膝栗毛』『おくのほそ道』などの江戸時代の作品が中心ですが、あの詩人の谷川俊太郎が『狂言』の訳に挑戦しているのも、トピックのひとつですね。

『伝記 世界の大作曲家 15人の偉人伝』

ひのまどか(監修) 伊藤良子(漫画) ほか

「魔王」「野バラ」を18歳で作曲したシューベルト。彼はすごい絶対音感の持ち主で、家にはピアノがありませんでしたが、楽器を使わずともすらすらと作曲できました。こうしたエピソードなどによって、4人の漫画家のマンガと共に大作曲家の生涯をダイジェストで振り返ります。附属のCDで音楽も聴けますよ。

今号のひとこと

Die Schlange, welche sich nicht häuten kann, geht zugrunde.
脱皮しない蛇は、滅びる。

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ(1844-1900)

哲学者ニーチェは、「永遠不変の真理などない。この世界は絶えず生成変化しているのであり、それに柔軟に対応するべきだ。」と唱えました。例えば量子力学などの科学を知った現代の人から見れば、これはむしろ「常識」のような考えですが、19世紀末のヨーロッパは「永遠不変の真理」を信じる保守的な人々が多く、彼は「神童」から転落して不遇な一生を終えました。彼の人生は見方によれば「負け組」だったのかも知れませんが、その教えは多くの学者や芸術家に影響を与えています。